

わたしの旅

夏のバイカル湖とイルクーツク 大自然と 古都の10日間

バイカル湖海と呼ぶ民夏短か

渡辺節子

企画/リーダー：渡辺節子

現地手配：Za Baikalom

協力：ブリヤート共和国観光局

期間：2017年7月4日（火）～13日（木）

参加者：5名（ワールドステイクラブ2名。佐竹勝年、
渡辺節子）

費用：約3000ドル

報告：

[http://www.shejapan.com/tours/2017baikal/report.h](http://www.shejapan.com/tours/2017baikal/report.html)

[tml](#)

日程

[http://www.shejapan.com/tours/2017baikal/schedule](http://www.shejapan.com/tours/2017baikal/schedule.pdf)

[.pdf](#)

ウランウデーウストバルグジン—バルグジン自然保護区—
バルグジンの谷—ウランウデーバイカル自然保護区—
イルクーツク

バイカル湖は世界の淡水の23%の水量があり、透明度、貯水量は世界一。

336本の川から水が入り込み、アンガラ川経由でエニセイ川と合流して北極海に流れ込む。琵琶湖の46倍の面積があります。

私は湖辺に暮らす先住民ブリヤート人（モンゴル共和国や中国の内蒙古自治区に住むモンゴル人と同じ人種で日本人とおなじDNAを持つ）が懐かしくもう6、7回は訪れています。

四季折々、朝昼晩と変化する湖の美しさに魅了され、短夏と極寒の長冬とを質素に心豊かに生きる人々に心惹かれます。

今回は荒れ果てたソ連時代の集団農場（コルホーズ）で細々と暮らしている母子に会い、少数民族ブリヤート人が白系ロシア人に福祉などの面でも差別されている様子も見聞きして、複雑な気持ちになりました。

ブリヤートの首都ウラン・ウデにはシベリアの日本人収容所があったこと、そしていまでも墓地跡がのこっています。

はじめて訪れたときに偶然セメイスキ（無形文化遺産）の老牧師に出会い、彼がなつかしように、私に日本人捕虜の話をしてくれたのです。

日本の歌、数の数え方まで覚えていました。野菜を分け与える代わりにもらったという日本製のバッジや飯盒などもさびついたまま大事に家宝として取ってありました。

極寒にたえられず日本人は大勢凍死したそうです。墓地から遺骨は引き上げられ、今は一本の墓碑銘だけが残っています。

町の中心にある立派な国立オペラバレエ劇場もシベリア鉄道も日本人捕虜が作ったものです。

今回は総勢5人で個人旅のようで実に楽しかったです。



参加者の声
(WSC 会員以外も含む)

☆今回の旅では色々貴重な経験が出来ました。先生と一緒でなければ出来ない旅でした。地球上にはまだまだ色々な土地や人々がいるのだと再確認できました。バイカル湖の雄大さにびっくりです！あれは海ですわね！また一緒する機会があれば幸いです。本当にお世話になり有難うございました。 (K・Y)



バイカル湖の夕日

~~~~~

☆大変お世話になりました。生涯忘れられない旅になりました。先生の知識、ご経験には圧倒されました。

ダリマとアニャのおもてなしと、かの地を知ってもらいたいという心意気に感動しました。 (T・S)

~~~~~

☆渡辺さんの旅の作り方が大会社のツアーとは違う、内容の濃い旅でした。渡辺さんに感謝しています。

ニューヨークにもクリミア半島、セバストポリなどにも行きたくなりました。

誕生日会

7月12日は私のお誕生日でした。渡辺さんが市場でケーキを買ってくれました。私はバラの花が沢山飾ったのをえらびました。大きなケーキが日本に比べたら格安でした。日本のケーキはバカ高いと思います。

77歳の記念すべき誕生日でした。あの場で誰も歳を聞いてこなかったのは気遣いでしたわね。よかったです。



ブリヤート人家族に誕生日会をしてもらう

牛の散歩

海辺のHotel Lukomorieに3泊しました。朝散歩にでて売店はどこだろうと歩いていました。三叉路の手前で牛がモーというのを聞いて前方を見ると牛がひとりで小走りにやってきました。ちょっと怖いと思った瞬間曲がって行き一安心、カルチャーショックでした。早朝散歩してよかったですと思いました。



散歩する牛

ドライバー

大体ドライバーは外国語を話さないからあまり交流することがありません。しかし今回のバイカル湖の旅では長時間ドライブ、しかも悪路、ドライバーのセルゲイはさぞ大変だろうと気の毒になり、最後まで無事に連れて行ってと祈る気持ちでした。

Ushukan島へのボート

小雨の中バイカルアザラシの自然保護区へ小さなボートで行きました。行きはデッキにいたらガイドのダリマが防寒具を見つけてきてくれました。

スピードを出す小さなボートはジャンプするのでバーをしっかり捕まえていなければなりません。寒くて怖くて必死でしたが日本で悩まされていた咳がぴたりと止まりました。空気が良いことは有難いとバイカル湖に感謝です。

島では木道をトイレまで歩いていたら蟻がズボンに這って登ってくるではありませんか。怖くなり、防虫スプレーを掛けておきました。帰りにキャプテンがボートの向きを変えるのに長いゴム靴を履いて水に入り力学通りにうまく回しました。隣にいた少し大きな船が応援してくれてぶつからないですみました。デッキが濡れてしまったのでキャプテンのそばの椅子に座りました。彼が操船しながらビスケットを勧めてくれた。ホテルの朝食のケーキをあげたらキャプテンが日本のお菓子がほしいと言ったので、子袋のポテトチップをあげました。渡辺さんがうまい棒の一つあげたら絵から子供向けのお菓子と分かったのでしょうか。小さい女の子に持って帰ると言いました。素直に子供のことを話しお菓子を持ち帰るといふ男に感動しました。帰りのボートも揺れて飛び上がって大変でした。

私はこの人に命を預けているから冷静であってもらわねばと気を遣いました。3分おきぐらいにデッキのダリマが無事か振り返って見ていました。

日本での日常では知的労働の人に遭うことが多いのですが体を張って仕事をしている人の勇氣に魅せられました。後にガイドのダリマがキャプテンの言葉を伝えました。「この船出が秋であれば船を出さなかった、今は夏だから日本人を連れて行ったのだ」と、バイカル湖はなかなか危険な湖でもあるようだ。



バイカル湖のボートとキャプテン

バルグジンスカヤ谷

延々と何もない草原をドライブしました。小雨が降っていて一面緑でした。恵みの雨だそうです。晴れの日の景色も見たかったなー。谷間に村があるところもありますが岩山と草地と道以外何もないところが多かった。地球は広いそして人間は小さいと感じます。車を止めてダリマが昼食の用意をしてくれた。

ホテルで用意してくれた魚の天ぷらやポテトにそえて生野菜を切ってくれた。ドライバーのセルゲイが紅茶を作ってくれた。ミルクを入れない人に先に、そのあとミルクを入れて濃く煮出すのがロシア流紅茶。

セルゲイの労もねぎらって2杯目を飲む。僅かに残った残飯は川の魚にあげていました。バイカル湖のボートのキャプテンも帰り着いた後ランチを作ってくれた。そんなありかたも素朴でよい感じ。



ガイドのダリマ

旅が地球を救う

今回の旅行、普通の人の行為に感動することが多かった。貧しさにめげず真面目に生きている人々のありかたに感動しました。

最期にダリマやセルゲイとハグしたときは嬉しかった。現代はツーリズムが盛んだけど旅をする人は戦争をしたいとは思わないでしょう。戦争をする人と旅をする人は両極端にいます。

難民としてではなく普通の旅人が多ければ多いほど戦争から遠のくでしょう。

エネルギーはそちらに回したいものです。(A・S)